

中国語を母語とする日本語学習者にとって 「変化」とは何か

—「消える」「閉まる」の使用文脈を手掛かりに—

陳 昭 心

(2009年10月6日受理)

What does “Change” Mean for Chinese Learners of Japanese
— Focusing on the context in which verbs *kieru* and *shimaru* are used —

Chen Jaushin

Abstract: The purpose of this paper is to clarify what “change” means for Chinese learners of Japanese (CNS). A survey was conducted on Japanese native speakers (JNS) and CNS, using the verbs *kieru* and *shimaru* in different contexts. The result showed that it was possible for CNS to choose between *-te iru* or *-ta* depending on the degree of confidence in change, and CNS tended to use the adverb *moo* more frequently compared to JNS. For CNS, the contexts in which *-ta* is chosen correspond to that in which *moo* is used. CNS seem to use *moo* to present the change, even if the change is not witnessed by the speakers. The concept of “change” covers wider situations for CNS than that for JNS. Japanese language instructors should be careful when they use the concept “change” in their explanation of the Japanese grammar.

Key words: change, *-te iru*-form, *-ta*-form, *moo*, the degree of confidence in change

キーワード：変化、テイル形、タ形、もう、変化への確信度

1. はじめに

日本語の「壊れる」「落ちる」「破れる」のような変化動詞のテイル形は変化の結果状態を表すとされる。「桜の花が落ちた」という変化の成立過程と、「桜の花が落ちている」という変化の結果状態とは異なる。

しかし、しばしば指摘されるように、中国語を母語とする日本語学習者は、上記のようなテイル形を使用せず、タ形を多用してしまう。例えば、靴下に穴が開

いているのに気づいて、「あっ、靴下が破れた」と言ったり、店頭のズボンのファスナーが壊れているのを見て、店員に教える場面で、「ファスナーが壊れました」と言ったりする。なぜなら、中国語のイメージでは、「壊」「落」「破」のような事態は、変化の実現済みや変化の成立に注目するのが一般的である¹⁾。そのような感覚で、日本語の「壊れる」「落ちる」「破れる」を使用する際にもタ形を使用して変化の成立を表すためである（張2001、黄・井上2005、井上2005など²⁾。

井上他（2002）、井上（2006）によると、中国語では、継続形を持つのは継続の局面を持つ動詞のみであるという。そのため、中国語の「死」（死ぬ）のような継続の局面を持たない動詞は、持続を表す「死着」とは言わず、完了を表す「死了」しか言えない。劉（2006）

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：白川博之（主任指導教員）、大浜るい子、
迫田久美子、町 博光、酒井 弘

によると、例えば「破」という事態は、「変化性の点的事態」として、「変化」という意味成分にその意味的焦点が固定されているため、たとえ発話において述べようとするのがその結果状態だったとしても、それを先行変化から切り離さずに捉えなければならない。そのような結果状態は通常「着」で述べることができず、「了」で述べるという。

このように、中国語では、「破」「壊」「落」などは、変化に注目しやすい事態であると言える。一般的に「破着」「壊着」「落着」と言わないため、どの文脈でも常に「了」を使用する。上記のような「あっ、靴下が破れた」や「ファスナーが壊れました」のような使用例は、この中国語の変化に注目しやすい事態の使用例であると思われる³⁾。

しかし一方、中国語の「開(開く)や「関(閉まる)のような事態は、必ずしも変化ばかりに注目するとは限らない。例えば、窓の開閉状態を尋ねる場合、中国語では「開着／関着」と言うが、場合によっては「開了／関了」とも言う。このような事態については、変化に注目するか否かということ、文脈によることになる。

中国語では、どのような文脈で変化に注目するのだろうか。また、日本語を使用する際に、そのような文脈の相違によって使用形式も変わるのだろうか。本稿では、これらの問題について考察する。

2. 変化への確信度について

中国語では、「関」のような動詞は、次のように文脈によって使用形式が異なる。

【例1】(さっき通った時は店が開いていたが、今行ってみると閉まっていた)

「関了／? ? 関着(呢)」

【例2】(あの店は、この時間にはたぶん閉まっているだろうと思いながら、行ってみたら、閉まっていた)

「関了／? ? 関着(呢)」

【例3】(今日は定休日であることを知らずに、店に行ったら、閉まっていた)

「? ? 関了／関着(呢)／没関」

例1の場合は、店の開閉前後の状態を見ているため、「関了」と言って変化に焦点を置くのが普通である。例2の場合は、店の開閉状態をある程度自分の中で把握でき、実際閉店前の状態を見ていなくても、「関了」と言って変化に焦点を置くのが普通である。それに対して、例3の場合は、その日の最初からずっと閉店状

態であるため、「関了」と言いにくいのである。

このことから、中国語では、話し手が例1のように変化の前後状態を体験したり、例2のように変化への確信が生じたりすることによって、変化を積極的に表すことがあると思われる。すなわち、実際に変化を体験したか否かにかかわらず、変化が生じたと確信することが、変化を言い立てる動機となっているのである。

このような中国語の言語感覚を考慮すると、中国語を母語とする日本語学習者を教える際に、中国語における変化の捉え方についても気をつけなければならないと思われる。そこで、本稿では、中国語を母語とする日本語学習者が、変化への確信度の異なる文脈の中で、日本語の使用形式(タ形とテイル形)をどのように変化させるのかを探る。

本稿では、アンケート調査を用い、「消える」「閉まる」の2動詞を取り上げる。これらはいずれも上述したように、必ずしも変化ばかりに注目されるとは限らない動詞である。「(電気が)消える」という語彙は、中国語の「灯熄」という事態にそのままあてはまる場合は、「了」と共起しやすいようであるが、話し言葉では「(灯)関了／関着」のように使用されることもあり、「破」「壊」のように変化ばかりに注目する事態ではないと判断する⁴⁾。また、この2動詞は、異なる使用文脈を設定しやすいということも理由である。

より多くの動詞を調査することが望ましいが、アンケート項目が煩雑になり、被調査者の負担になることを考え、本稿では、「消える」「閉まる」の2動詞とした。

次節では、調査の概要を述べた後、各文脈の相違とその使用形式の予想と結果を述べていく。

3. 調査とその結果

3.1 調査の概要

調査の目的は、話し手の変化への確信度が異なる文脈では、変化動詞「消える」「閉まる」の使用形式(特にタ形とテイル形)が変わるか否かをみることである。調査は2009年5月中旬から6月中旬にかけて行われ、被調査者は台湾の大学に在籍している日本語学習者2~4年生(主に日本語を専門にしている)81名と、日本語母語話者52名である⁵⁾。調査方法は質問紙法であり、指定した動詞を、提示された場面にふさわしい形式で記入してもらった。中国語を母語とする日本語学習者の調査用紙の場面説明は中国語で提示された。提示場面数は計12場面、そのうち「消える」を使用する3場面と「閉まる」を使用する4場面が今回の考察の対象となる調査項目である⁶⁾。

中国語を母語とする日本語学習者にとって「変化」とは何か
 —「消える」「閉まる」の使用文脈を手掛かりに—

以下、日本語母語話者を「母語話者」、中国語を母語とする日本語学習者を「学習者」と略称する。説明の便宜上、同じ動詞ごとに場面をまとめて述べる。

3.2 調査場面とその結果の分析

3.2.1 「消える」を使用する場面

「消える」を使用する3場面の違いは、具体的に次の通りである。

【場面1】連絡しないで、いきなり友人宅を訪問しました…

あなた：「電気が_____から、留守みたいだね。【消える】」

場面1は、話し手がいきなり友人宅を訪問した場合で、電気の前の状態を見ていないため、変化を感じないはずである。よって、テイル形が使用されると予想される。

【場面2】深夜、たまたま友人宅の前を通りました…

あなた：「電気が_____から、もう寝たのかな。【消える】」

場面2は、話し手が深夜たまたま友人宅を通った場合で、深夜という時間帯に電気が消えるという変化が起こったことは、比較的推測しやすい可能性がある。よって、タ形が使用されやすいと予想される。

【場面3】一時間前に研究室の前を通った時は明るかったのですが、今見たら真っ暗でした…

あなた：「電気が_____から、皆帰っちゃったのかな。【消える】」

場面3は、話しが一時間の間をおいて見た光景が異なるという設定であり、そのため、変化が起こったことを確信できる。よって、タ形が使用されると予想される。

それぞれの場面の調査結果は次のとおりである。

表1-1 場面1の結果

	母語話者 52名	1級 81名
テイル系	51 ⁷⁾ (98.1%)	56 (69.1%)
ル系	0 (0.0%)	4 (4.9%)
タ系	1 (1.9%)	19 (23.5%)
てしまう系	0 (0.0%)	1 (1.2%)
その他	0 (0.0%)	1 (1.2%)

表2-1 場面2の結果

	母語話者 52名	1級 81名
テイル系	44 (84.6%)	34 (42.0%)
ル系	0 (0.0%)	1 (1.2%)
タ系	7 (13.5%)	45 (55.6%)
てしまった系	0 (0.0%)	1 (1.2%)
その他	1 (1.9%)	0 (0.0%)

表3-1 場面3の結果

	母語話者 52名	1級 81名
テイル系	48 ⁸⁾ (92.3%)	14 (17.3%)
ル系	0 (0.0%)	3 (3.7%)
タ系	2 (3.8%)	42 (51.9%)
てしまう系	0 (0.0%)	1 (1.2%)
てしまった系	2 (3.8%)	17 (21.0%)
その他	0 (0.0%)	4 (4.9%)

母語話者は、場面2ではタ形の使用も少なくはなかったが、全体的にテイル形を使用している傾向がみられた。すなわち、母語話者は変化への確信度を問わず、見た時の状態をそのまま表す傾向があると言える。母語話者は、3場面で話し手が見た光景は「暗い状態」であるため、テイル形を使用しているのだろう⁹⁾。

一方、学習者は、場面1では、過半数以上テイル形を使用しているが、場面2では、その使用が減っており、タ形の使用が過半数以上まで増えている。場面3では、タ形を過半数以上使用し、さらにテシマツタ形を使用している。予想通りに、話し手の変化への確信度の異なる文脈では、タ形とテイル形という使用形式の違いが見られた。

ただし、場面3では、学習者のテシマツタ形の使用が増えていることから、学習者の使用形式は後続する発話の形式に影響される可能性もあるかもしれない。例えば、場面1は「留守」のような状態の後続であるのに対して、場面2と3は「もう寝た」「皆帰っちゃった」のようなタ形の後続であることも、学習者が使用形式を選ぶ際に手掛かりになるかもしれない。学習者にとって、「帰っちゃった」のような事実上「いない」と同等の状態を、「状態」として捉えにくい可能性があるだろう。

3.2.2 「閉まる」を使用する場面

「閉まる」を使用する4場面の違いは、具体的に次の通りである。

【場面4】正午12時に図書館に行ったら、「本日閉館」

の札がありました・・・

あなた：「_____【閉まる】」

場面4では、休館日の設定であり、その一日中ずつと閉館状態であるため、変化を感じないはずである。よって、テイル形が使用されると予想される。

【場面5】夕方、友人に声をかけられました・・・

友人：「一緒に銀行へ行ってもらえない？」

あなた：「この時間は、_____【閉まる】」

場面5では、話し手は銀行の営業時間を知っているはずである。発話時以前のある時点で閉店という変化があったと予想できるため、実際に見ていなくても変化への確信ができる。よって、タ形が使用されると予想される。

【場面6¹⁰⁾】初めての海外旅行。夜8時過ぎ、ショッピングしようと思ってデパートへ行ったら閉店でした・・・

あなた：「_____【閉まる】」

場面6では、話し手が海外のデパートの閉店時間を知らない設定である。この場面は、台湾人学習者にとって、想定していた営業時間より早く閉まることになっている。例1のように閉店前の状態を見ていなくても、変化への確信ができる。よって、タ形が使用されると予想される。

【場面7¹¹⁾】午後3時までに銀行に着くように急いで行ったら、「closed」の札があって間に合いませんでした・・・

あなた：「_____【閉まる】」

場面7では、話し手が銀行の営業時間を知っており、ぎりぎりに銀行に着いた時、自分の中で期限を意識しているはずである。その期限になったら閉店という変化があるため、変化への確信ができる。よって、タ形が使用されると予想される。

それぞれの場面についての調査結果は、以下のとおりである。

母語話者は、場面7ではテシマッタの使用も目立つが、基本的にはテイル形を使用している傾向がみられた。すなわち、母語話者は変化への確信度を問わず、見た時の状態をそのまま表す傾向があると言える。母語話者は、4場面では話し手が見た光景は「閉館（店）状態」である（場面5は実際見ていないが「この時間に

表4-1 場面4の結果

	母語話者 52名	1級 81名
テイル系	51 (98.1%)	44 (54.3%)
タ系	0 (0.0%)	17 (21.0%)
てしまった系	1 (1.9%)	0 (0.0%)
ル系	0 (0.0%)	18 (22.2%)
その他	0 (0.0%)	2 (2.5%)

表5-1 場面5の結果

	母語話者 52名	1級 81名
テイル系	52 (100.0%)	32 (39.5%)
タ系	0 (0.0%)	36 (44.4%)
ル系	0 (0.0%)	12 (14.8%)
その他	0 (0.0%)	1 (1.2%)

表6-1 場面6の結果

	母語話者 52名	1級 81名
テイル系	47 (90.4%)	15 (18.5%)
タ系	3 (5.8%)	46 (56.8%)
てしまった系	2 (3.8%)	18 (22.2%)
その他	0 (0.0%)	2 (2.5%)

表7-1 場面7の結果

	母語話者 52名	1級 81名
テイル系	31 (59.6%)	6 (7.4%)
タ系	1 (1.9%)	48 (59.3%)
てしまった系	20 ¹²⁾ (38.5%)	26 (32.1%)
その他	0 (0.0%)	1 (1.2%)

行っても」見た光景を言っていると解釈できる）ため、テイル形を使用しているのだろう。相対的にテシマッタ形を使用しやすくなった場面7と、他の3場面（4～6）の違いを強いて考えてみると、場面7だけは期限という前提があることが影響していると考えられる。

一方、学習者は、場面4では、過半数以上テイル形を使用しており、場面6と7では、過半数以上タ形を使用している。この3場面では、予想通りに、話し手が変化への確信度の異なる文脈では、タ形とテイル形という使用形式の違いが見られた。

しかし、場面5では、タ形の使用が過半数にはなっていない。テイル形の使用率を見ると、タ形よりやや少なかったが、場面6と7のテイル形の使用率よりも高かった。この場面5において、学習者がテイル形を使用する理由の1つとして、「この時間は」という基準時の明示が挙げられる。母語話者は、基準時が明示されていた場面5では、全員テイル形を使用している。学習者も、基準時の明示によってテイル形を使用しやすくなる可能性があるかもしれない。ただ、場面5は

場面6と7とは違い、眼前の状態をその場で言うているのではない。そのため、変化が起こったという実感は場面6と7ほど大きくなかったことも考えられる。

ここで興味深いことは、母語話者はテイル形とタ形を使い分けしているというよりも、むしろ、場面7のように、テイル形とテシマツタ形を使い分けしているということである。学習者が、タ形とテシマツタ形を区別しているかどうかは不明であるが、母語話者にとっては、テシマツタ形がタ形とは異なるということがうかがえる。場面7では、単純なタ形の使用は不自然であると言っても過言ではないほど使用頻度が低かったが、テシマツタ形では使用しやすくなる。このことは、つまり、テシマツタ形はタ形とテイル形の間の溝を埋めていると言えるのかもしれない。

3.3 調査のまとめ

調査の結果は、次のようにまとめることができる。

- (1) 中国語を母語とする日本語学習者は、眼前の状態をその場で言う際に、変化への確信度の違いにより、テイル形とタ形という使用形式を変える可能性がある。具体的には、変化前後の状態を見たり、変化の起こりやすい時間帯での発話だったり、あるいは変化が起こったことを確信できたりする文脈では、相対的にタ形を使用しやすくなる。
- (2) 日本語母語話者は、眼前の状態をその場で言う際に、変化への確信度の違いにより、テイル形とタ形という使用形式を変えることはない。基本的に眼前の状態をそのままテイル形で述べる。

4. 「もう」の使用との関わり

ここで、もう1つ言及に値する事実を挙げる。今回の調査では、学習者の回答に場面によって「もう」を含む回答が顕著に観察された。「もう」は対象項目とされないため、「もう」を含む回答は被調査者の自由記述によるものである。各場面における「もう」の使用状況は、次のとおりである。

表1-2 場面1における「もう」の使用

	母語話者 52名	1級 81名
もう~ている系	0 (0.0%)	0 (0.0%)
もう~た系	0 (0.0%)	0 (0.0%)
もう~てしまった系	0 (0.0%)	0 (0.0%)
合計	0 (0.0%)	0 (0.0%)

表2-2 場面2における「もう」の使用

	母語話者 52名	1級 81名
もう~ている系	0 (0.0%)	0 (0.0%)
もう~た系	0 (0.0%)	4 (4.9%)
もう~てしまった系	0 (0.0%)	0 (0.0%)
合計	0 (0.0%)	4 (4.9%)

表3-2 場面3における「もう」の使用

	母語話者 52名	1級 81名
もう~ている系	0 (0.0%)	2 (2.5%)
もう~た系	0 (0.0%)	4 (4.9%)
もう~てしまった系	0 (0.0%)	0 (0.0%)
合計	0 (0.0%)	6 (7.4%)

表4-2 場面4における「もう」の使用

	母語話者 52名	1級 81名
もう~ている系	2 (3.8%)	2 (2.5%)
もう~た系	0 (0.0%)	0 (0.0%)
もう~てしまった系	0 (0.0%)	0 (0.0%)
合計	2 (3.8%)	2 (2.5%)

表5-2 場面5における「もう」の使用

	母語話者 52名	1級 81名
もう~ている系	6 (11.5%)	24 (29.6%)
もう~た系	0 (0.0%)	29 (35.8%)
もう~てしまった系	0 (0.0%)	0 (0.0%)
もう~る系	0 (0.0%)	8 (9.9%)
合計	6 (11.5%)	61 (75.3%)

表6-2 場面6における「もう」の使用

	母語話者 52名	1級 81名
もう~ている系	5 (9.6%)	13 (16.0%)
もう~た系	1 (1.9%)	33 (40.7%)
もう~てしまった系	0 (0.0%)	13 (16.0%)
もう~その他	0 (0.0%)	1 (1.2%)
合計	6 (11.5%)	60 (74.1%)

表7-2 場面7における「もう」の使用

	母語話者 52名	1級 81名
もう~ている系	3 (5.8%)	4 (4.9%)
もう~た系	0 (0.0%)	15 (18.5%)
もう~てしまった系	1 (1.9%)	5 (6.2%)
合計	4 (7.7%)	24 (29.6%)

上記の結果が示しているように、全体的に、学習者が母語話者より「もう」を多く使用している。特に場面5~7では、学習者の「もう」の使用率が相対的に高かった。この3場面では、母語話者も「もう」を使

用しているが、学習者ほど積極的ではなかった。

また、場面2と3では、学習者の中に「もう」を使用している者がいたが、母語話者にはいなかった。「もう」の不使用は特に母語話者の場合、問題提示の仕方に影響を受けたのかもしれない¹³⁾。しかし、学習者は、「もう」を重複使用してでも入れていること、及び、前半部の「電気が」の後ろに「もう」を使用していることが観察された。学習者があえて重複使用してでも「もう」を入れることは、これもまた母語話者より積極的に使用していることの現われと言えよう。

これらのことは、(1)で述べたことと照らし合わせると、次のようなことが考えられる。すなわち、学習者がタ形を使用しやすい場面と、「もう」を使用しやすい場面は、重なるのではない。逆に、学習者が比較的テイル形を使用しやすい場面1では、「もう」の使用がない。これらのことは軌を一にしたことと言えるだろう¹⁴⁾。

それでは、なぜ学習者がタ形を使用しやすい場面と、「もう」を使用しやすい場面は重なっているのだろうか。

池田(1999)によると、「もう・まだ」の使用は状態の移行を前提とする。状態の移行は、「もう・まだ」が用いられる際の必要条件であるという。例えば、「太郎はもう／まだ中学生だ」という文は、現在の太郎の属性がある状態の変化の結果／前段階であることを意味している。つまり、ある状態から別の状態への移行があることが必要条件となるのである。「もう仕事終わった?」「うん、もう終わったよ」のような動詞述語文の場合も、「終わっていない」状態から「終わっている」状態への移行があることを前提とする¹⁵⁾。

状態の移行ということは、つまり変化が生じることである。過去に変化が起こったことが意識され、その結果「もう」が用いられるわけである。「もう」の使用可能な場面は、必ず発話時(厳密には基準時)以前に変化が起こった局面であるため、学習者はその変化のことを実現済みのこととして捉える。そのため、タ形を使用しやすくなるのではないかと考えられる。

新屋他(1999)は、「学習者は『～ています』というアスペクト形式を用いない代わりに、その変化が完結していることを積極的に表そうとして『もう』を使ったのではないかと考えられ」と述べているが、本調査の結果もそのような推測を裏付けていると言える。

5. 指導上の注意点

変化動詞のタ形とテイル形の使い分けについて、例えば、次のような教育現場向けの説明が提案されている¹⁶⁾。

「窓が割れました」は、窓が割れるという変化が発生したことを表し、窓が割れる前のことを知っている場合に用いる。「窓が割れています」は、窓が割れた後であることを表す。窓が割れた後しか知らない場合は、「割れました」とは言えず、「割れています」と言わなければならない。

(井上(2005) pp.95-96より)

このような説明を見た学習者は、「変化前のことを知っている場合にタ形を用いる」と理解する可能性があるだろう。しかし、例えば、場面3のような文脈では、変化前の状態は知っているが、「電気が消えている」を使用すべきであろう。学習者は「変化前の状態が明るかったことは知っている。1時間前に見たから」という理由で、「だから『電気が消えた』と言っても良い」と拡大解釈してしまう可能性があるのではないだろうか。

初めて見た窓の場合は、「割れた前の状態」を見たことがないため、その意味での「変化前の状態を知らない」のであるなら、上記のような文法説明でも理解できるかもしれない。しかし、(1)で述べたように、中国語を母語とする日本語学習者は、眼前の状態をその場で言う際に、変化前後の状態を見た場合はもとより、変化の起こりやすい時間帯での発話だったり、あるいは変化が起こったことを確信できたりする文脈でも、相対的にタ形を使用しやすくなることから、「変化前のことを知っている」という説明は拡大解釈される可能性があるのではないだろうか。

そこで、教育現場ではどのような時にタ形を使用するのかを具体的に提示する必要がある。例えば、東京タワーの消灯を待っている際、消灯の瞬間を見た場合は、「消えた」と言う、のような説明が必要であろう。拡大解釈を避けるために、「目の前で見た」という条件が必要かもしれない¹⁷⁾。

6. まとめと今後の課題

本稿は、「関了／関着」のような、必ずしも変化ばかりに注目するとは限らない事態を取り上げて、中国語では、どのような文脈で変化に注目するのか、また、日本語を使用する際に、そのような文脈の相違によってタ形とテイル形の使用傾向も変わるのかを考察した。

中国語では、話し手が変化の前後状態を体験したり、変化への確信が生じたりすることによって、変化を積極的に表すことがある。そして、中国語を母語とする学習者は、日本語の変化動詞「消える」「閉まる」を使用して眼前の状態をその場で言う際に、変化への確信度の相違によって、テイル形とタ形という使用形式

を変えらる可能性がある」と指摘した。一方、日本語母語話者は、基本的に眼前の状態をそのままテイル形で述べると言えよう。また、中国語を母語とする日本語学習者にとって、具体的に、変化前後の状態を見たり、変化の起こりやすい時間帯での発話だったり、あるいは変化が起こったことを確信できたりする文脈では、相対的にタ形を使用しやすくなるため、文法説明を提示する際に、「変化前の状態を知っている」というような説明を拡大解釈させないように注意する必要があることも指摘した。

しかし、残された課題も多くある。例えば、今回は「消える」「閉まる」のみ取り上げて、文脈の相違によるタ形とテイル形の使用傾向をみた。変化動詞は、それぞれ語彙の意味の違いによって、タ形とテイル形が実現される意味も異なるため、今後はさらに他の様々な語についても検討しなければならない。また、テシマッタ形がどのようにテイル形とタ形との溝を埋めるのかについても興味深い課題である。

【注】

- 1) 呂 (1980) によると、形容詞「壊」は「了」などをとめない、アスペクトを表すという。そのため、中国語の「壊」は形容詞でありながらも、日本語の「壊れる」のような動詞に近い。
- 2) 張 (2001) では、「落」は離脱現象を表し、「破」は静的な状態を表すというような違いがあるが、いずれも変化の成立に注目しやすくとされている。
- 3) 張 (2001)、黄・井上 (2005)、井上 (2005) で挙げられている動詞は「割れる」「壊れる」「破れる」「落ちる」「はげる」「直る」「取れる」である。
- 4) 「電気をつける」「電気を消す」は「開灯」「关灯」と言うため、「電気がつく」「電気が消える」のような「灯開」「灯関」の言い方は、自動詞的な用法になる。
- 5) 今回得た有効なアンケート部数は115部であった。被調査者の日本語能力の内訳は次の通りである。すなわち、日本語能力試験1級合格81名、2級合格26名、3級合格8名である。本稿では、学習者数や日本語能力などを考慮し、1級合格の81名のみを取り上げる。
- 6) 他の5場面は「降る」「緊張する」「話す」「終わる」という動詞を使用した。
- 7) 1名がテシマッテイルを使用している。
- 8) 2名がテシマッテイルを使用している。
- 9) 比較的タ形の使用が多く見られる「場面2」と、他の2場面「場面1と3」の違いを強いて考えてみ

- ると、場面2の「もう寝た」という表現と、場面1の「留守」や場面3の「皆帰っちゃった」のような「いない」に相当する状態の後続との違いが、何らかの影響を与えているのではないかと考えられる。
- 10) 台湾ではデパートはふつう夜9時半まで営業する。
 - 11) 学習者向けの場面設定は午後3時半になっている。台湾では銀行は午後3時半まで。
 - 12) 1名が「閉まったかー (閉まってしまったー)」と回答している。
 - 13) 母語話者が「もう」を使用していない理由は、2つ考えられる。1つは、「もう」を使用するのなら、後半部の「もう～のかな」という部分で用いる。もう1つは、前半部に「もう電気が～」という形式で用いる。しかし、この2つはアンケートの問題提示の仕方に制限されているため、「もう」の使用がなかったかもしれない。
 - 14) ただし、場面4は、「その一日中閉館状態であるため変化を感じないはず」という文脈であるにもかかわらず、学習者の中に「もう」を使用している者がいた。その理由は、次のように考えられる。場面4では、「今日は休館日だった」という解釈をするのなら、その日に「開いている→閉まっている」という状態の移行がないはずである。しかし、場面4に対して「今日はいつもより早めに閉館した」という解釈をしたとすれば、「開いている→閉まっている」という状態の移行があるようになる。よって、「もう」の使用も可能になるのである。
 - 15) 金水 (2000) は、「まだ」「もう」が用いられる条件として、次の3点が必要であると述べている。
 - a. 時間の進展とともに推移・変化する状態が前提される。
 - b. 発話に先立って推移の段階についての想定があり、その想定と発話によって主張される段階が食い違っている。
 - c. 想定より主張が遅れている場合は「まだ」、進んでいる場合は「もう」が用いられる。その中のa. は、池田 (1999) が言っている状態の移行と同じであると思われるが、b. の条件は必要条件ではないと思われる。

例えば、「もうご飯食べた？」のような発話では、「食事が済んでいない→食事が済んでいる」という状態の移行が前提となるが、必ずしも「食べていないと思っていたのに、もう食べた？」のような想定があるとは限らない。
 - 16) このような文法説明は、井上他 (2002) などの研究成果をもとにしたものである。
 - 17) 変化動詞のタ形の使用には他にも様々な条件が考

えられる（例えば話し手の立場など）。また、変化動詞にも性質によってタ形の使用条件が変わると考えられる。これについてはまた別の機会に論じる。

【引用文献】

- 池田英喜（1999）『『もう』と『まだ』－状態の移行を前提とする2つの副詞－』『阪大日本語研究』11, 大阪大学文学部日本語学講座, pp.19-35
- 井上 優・生越直樹・木村英樹（2002）「テンス・アスペクトの比較対照－日本語・朝鮮語・中国語」生越直樹（編）『シリーズ言語科学4 対照言語学』東京大学出版会, pp.125-159
- 井上 優（2005）「学習者の母語を考慮した日本語教育文法」野田尚史（編）『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版, pp.83-102
- （2006）「対照研究とは何か」縫部義憲（監修）、多和田真一郎（編集）『講座・日本語教育学 第6巻 言語の体系と構造』スリーエーネットワーク, pp.110-125
- 金水 敏（2000）「時の表現」仁田義雄・益岡隆志（編）『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店, pp.3-92
- 黄 麗華・井上 優（2005）「対照研究と日本語教育」松岡 弘・五味政信（編著）『開かれた日本語教育の扉』スリーエーネットワーク, pp.122-136
- 新屋映子・姫野伴子・守屋三千代（1999）『日本語教科書の落とし穴』アルク
- 張 麟声（2001）『日本語教育のための誤用分析－中国語話者の母語干渉20例－』スリーエーネットワーク
- 劉 綺紋（2006）『中国語のアスペクトとモダリティ』大阪大学出版会
- 呂 叔湘（1980）『現代漢語八百詞』商務印書館, 牛島徳次・菱沼透（監訳）『中国語文法用例辞典』東方書店, 1992